

〈紹介〉

村田正志編

『出雲国造家文書』

島根県教育委員会編『出雲意宇六社文書』

米原正義

八雲立つ出雲は、地理的にいうと山陰の一隅に過ぎないが、歴史的には「出雲ハ神国の眼」といわれる如く古代文化の枢要地であった。その古代出雲の政治と祭祀の権を掌握していたのは、いうまでもなく出雲国造家である。

出雲国造家は南北朝初期に千家・北島両家に分裂して今日に及ぶが、このうち北島国造家の古文書を収録して昭和四十三年七月に公刊されたのが『出雲国造家文書』である。現在出雲大社の祭祀を掌る出雲国造家は島根県簸川郡大社町にあるが、古くは松江市の南郊大庭の地にあった。大庭周辺と近くを流れる意宇川の流域一帯は、古代出雲の政治文化の中心地であったと思われる。この意宇川流域には出雲国造と相関連する六社が鎮座する。六社というのは神魂神社（大庭の大宮）・式内真名井神社（伊弉諾社）・国府総社六所神社・式内熊野神社（熊野大社）・八重垣神社（佐久佐社）・式内揖夜神社（言屋社）のことで、この六社およびその社家に伝存する古文書の主要なものを収めて発刊されたのが『出雲意宇六社文書』である。昭和四十九年三月のことであった。

一体山陰に伝存する古文書は出雲が第一に位し、出雲の古文書の主要なものは社家文書で、そのまま出雲の歴史を物語るとは、国造家文書の編者村田正志博士のことばである（「出雲に於ける古文書の調査」）。社家文書の主要なものは東大史料編纂所に影写本があつて学界に寄与するところが大きい。島根県下の

史料は『島根県史』などに少なからず所引され、県史編纂時の蒐集史料も県立図書館に所蔵されているが、中には首肯し難いものもあるようである。また昭和四十一年刊行の『新修島根県史』史料編一に多数の古文書が収められたけれども、いまだしの感が深い。しかし鰐淵寺文書は昭和三十八年曾根研三氏の『鰐淵寺文書の研究』として刊行され、我々を益するところ多大である。このほかいくつかの文書目録が発刊されている。出雲における古文書の蒐集・刊行をこのように見てくると、『出雲国造家文書』『出雲意字六社文書』発刊の意義はおのずから明らかであり、出雲人ならずとも、ともに待望久しい古文書集といわねばならない。

『出雲国造家文書』本書を繕いてまずカラー写真、色とりどり千四百五十二箇の「美須麻流の玉」の気高さに圧倒され、北島国造家の歴史の重味を感じ得ないではない。この北島国造家に蔵する古文書のうち主なもの四二九通を撰び、年月日順(含推定)に配列、文書名を付け、頭注・傍注を施し、さらに古文書に解説を加え、付録として「出雲国造世系譜」を載せたのが本書である。

収録文書は長寛二年(一一六四)時村渡状にはじまり、慶応四年松平直忠祈願文に至る。平安一通、鎌倉三一通、南北朝三三通、室町四〇通、安土桃山六一通、江戸二六三通で、由緒深い北島国造にしては古代文書の殆んど見えないのは不思議である。これは出雲国造家は久安五年(一一四九)の火災で相伝文書を焼失したからで、偽文書が多いといわれる出雲にあって、北島国造家があるのままでの文書を伝えていることを意味しよう。内容は社領関係約八〇通、造り遷宮関係約七〇通、国造神主職・火継神事関係約六五通、祈禱・奉謝関係約五〇通、国造分裂・抗争関係約五〇通、社役人・社家関係約三〇通、国造の国内神社支配関係約一〇通、その他となっている。今少し立入って見ると、国造家の地頭職獲得、国造と中原氏との国造職をめぐる抗争、鎌倉から室町にかけて

の出雲・隠岐両国守護や守護代が明らかにされる。守護についていえば、山名時氏の隠岐守護、時氏の孫讃岐守護の出雲守護の徴証など従来知られないものであるが、五九頁の左衛門尉や七三頁の守護人前信濃守源は佐々木泰清であり、文書名を改める要がある。また後醍醐天皇論旨・後村上天皇論旨が目を引き、連歌師宗義・春日局・徳川光圀その他著名人の書状も載る。が最も着目すべきは国造分裂による千家・北島両家の主導権争いであり、神火神水の々相承を誇る北島国造の申状に迫力を感じるもの私ひとりではあるまい。両家の争いは単に両家の問題ではなく、出雲の歴史に直結するからには無視できないものがあり、本書によって研究を深めることができるであろう。戦国時代に関心をもち私は、何よりも尼子文書に注意する。その一、月山富田城を本拠に四隣を圧した尼子経久、その次男国久は新宮党の党首として尼子の柱石と考えられるが、主の晴久(経久の孫)の命を待たず、独自に所領の紛争を裁決するなど、越権行為のあった事実が確認され、新宮党が晴久によって潰滅させられる原因の一つではなかったかということ(八八・八九号)。その二、晴久の歿年は永禄三年十二月廿四日とされるが、尼子晴久奉行連署奉書(一一〇号)の袖判が晴久とされている、これを信ずると、歿年は永禄四年十一月廿六日以後となり、研究課題である。

本書の編者村田氏は夙に『南北朝史論』の著書があり、出雲を主題にした論文も収め、以後出雲に関する玉稿は現地を踏査し、土地に根ざしたものであつて、氏の出雲へのひたむきな情熱が本書となったといつてもよいであろう。とはいえ個人の熱意だけでは解決できないのはこの種の文書の常である。にもかかわらず出版できたのは、出雲国造北島家第七十九代北島英孝氏の英断であった。さらに出版社への懸橋として大阪教育大学教授鳥越憲三郎博士の尽力も見逃せない。かくて本書は、村田氏の学問への熱意が、北島氏、鳥越氏、清文堂前田社長父子を動かして世に出たとすべきであろう。

ところで『出雲国造家文書』という書名について一言する。出雲国造家が千家・北島両家あることは厳然たる歴史的事実で、松江藩主松平宗衍も両家は「少も勝劣無之候、仍本家末家之差別も無之」との文書を発している(三六〇号)。従って誤解され易い書名といわねばならない。以前本書の紹介をした際にも述べたが(『国史学』78)、千家国造家文書も事情許せば、村田氏の手によって公刊されることを重ねて期待するものである。

(A5判、本文七一二頁、定価八〇〇〇円、昭和四十三年七月、清文堂刊)。

『出雲意宇六社文書』本書は出雲意宇六社文書と題するが、六六六通(うち一通重複)のうち四八〇通が大庭の神魂神社社家秋上家伝来の文書で、七二パーセントを占める。秋上家文書は応永廿一年(一四一四)の大草郷坪付にはじまり、明治の島根県達に至る。内容は北島・千家両国造の書状や証文、諸氏の売券、尼子・毛利・堀尾・京極・松平など出雲領主関係の書状・判物・安堵状・寄進状など、神魂社規式、神魂社坪付註文、秋上氏の所領所職関係の文書などであるが、最も特色のあるのは国造職相統の際に行われる儀礼の火継神事記録でかなり多い。火継神事と毎年の新嘗会は、ともに神魂社で執行されてきた。神事は古来秘儀とされ、両国造家文書その他に關係史料はあるが、全面公開に至っていないだけに、研究者を辟益するところは大きいものがある。またすでに村田氏の論説されたように、神魂社社殿が、天正十一年二月天火のために全焼したことを証する文書もあり、現在の社殿が南北朝の遺構と称し得ないことを立証する。私にとって有難いのは、秋上家が所領買得によって着々勢力を加えてきたこと、尼子氏の富田城が「とんだ」ではなく「とだ」と読むべきであること(四四・五九号)、尼子家再興を期して上落した秋上三郎右衛門尉が、幸益、その子庵介が宗信を称していたこと(四七八号)などである。ここで気づいた一、二を述べると、一一八号の三奉行は四奉行とすべきであり、一二三・一二四号は村田氏の注記はあるけれども、晴久ではなく勝久かと思う。

次に真名井神社社家広江家文書である。当社境域の東方近く「清冷希代ノ靈水」真名井滝があり、「大社国造、大庭の斎庭ニ来ルトキハ、必ズ此水ヲ用」とある如く(二六号)由緒ある神社であった。しかし文書の大部分は本書所収の明細帳によると、寛文元年(一六六一)の火災で焼失した模様で(凡例に宝永元年とする。存疑)、天正十三年の吉川元春書状以下二六通を収める。次に六所神社社家吉岡家文書は、江戸末の願書類五通だけ収録されている。だが六所神社・真名井神社ともに近世では秋上氏の所管兼帯した關係から、秋上家文書に収められているものも少くない。当社本殿を含む境内が国庁の中心部と推定され、国府総社としての権威を想望することができる。次に熊野神社文書は、当社が出雲族の祖神を祭り、かつては国内第一の大社で、千家国造の火継神事は往古この社で執行され、中古に至って神魂社で行うようになったというからさぞ文書も多かったと考えられるが、所収文書は四二通である。しかも史料的价值の高いのは、当社と無關係の武家文書(足利義親・秀吉・家康・松永久秀など)で新史料といえよう。

次に八重垣神社社家佐草家文書は永禄九年閏八月の毛利元就判物以下四四通で、毛利氏以降の領主關係の書状が多く、他に社領検地帳、造営覚書が注意される。一号文書は尼子氏滅亡寸前のもので、毛利氏の社寺懐柔策が読みとれる意味で貴重であり、一三号文書によると元就は神木の杉を植えたという。なお一三号により、尼子氏の八重垣諸神田安堵状が数通伝存していたことが知られる。最後に揖夜神社社家井上家文書を六八通収める。この文書は平安一通(新写)、鎌倉三通、南北朝三通(うち二通南朝文書)それ以降といった次第で、意宇六社中鎌倉時代の古文書を伝えるのは当社だけで、由緒の深さが窺われる。特に注目されるのは尼子晴久寄進状(九号)である。これによると晴久の曾祖父は前上野入道祥雲である。系図では持久(上野介、正雲寺)―清定(洞光寺殿)―経久―政久―晴久と伝える。然らば曾祖父は清定であり、今後の研究が

六社文書の概要であった。本書の編纂は島根県教育委員会の事業として昭和四十二年末に開始され、その工程は県文化財専門委員村田正志（国士館大学教授・国学院大学講師）・同加藤義成（島根大学講師）・同島田成矩（松江工業高専助教）・県教育委員会の石塚尊俊主査・近藤正・長谷川清の諸氏が分担したが（本書凡例）、古文書の鑑査・解読された初稿本の校訂、原本の修理表装の世話はもとより、印刷原稿の清書は村田氏の手に成り、氏が本書の事実上の編者であることは何人も認めるであらう。されば凡例にも「村田委員の労苦は特に銘記したい」と述べているのである、村田氏は『出雲国造家文書』の編纂以後、『宮崎官史料』（A5版、九四七頁、五五二通所収）を編み、最近では『五条家文書』の校訂者である。氏は多年東大史料編纂所にあつて大日本史料六編（南北朝）の編纂に従事され、「南北朝時代史研究家として最高權威であり、しかも古文書学の第一人者である」（荻野三七彦氏「五条家文書の出版を慶ぶ」）。四十九年から文化庁の文化財保護審議会専門委員（古文書の部）も兼ねていられる。こうした専門家の校訂によって、出雲の古文書がまた世に出たことを喜ぶたい。

それにしても、近年古代出雲の一大要地・意宇六社の中心地点に、県教育委員会が「八雲立つ風土記の丘」を設けたことに敬意を表する。この風土記の丘と関連する事業が六社文書の刊行であつたわけで、種々の労苦を克服して、目的を達成された教育委員会の情熱もまた見落せないものがある。

(A5版、本文二〇三三頁、昭和四十九年三月、島根県教育委員会〈松江市殿町一〉発行)